

辜鴻銘とアーサー・スミス

—東西文化比較と中国人論—

愛知県立大学外国語学部中国学科
川尻文彦

辜鴻銘とアーサー・スミスの名前を聞いて聞き覚えのある研究者はほとんどいないであろう。今日では辜鴻銘は中国近代思想の分野において、アーサー・スミスは明治思想の分野において、専門家の中にわずかな知名度を有するのみである。この小文の目的はこの一見関連のなさそうな二人の人物の接点を探ることによって、中国近代思想研究に新視角を提示する(かもしれない)材料を紹介することにある。

アーサー・H・スミス(Arthur Smith) (一八五四～一九三二)はアメリカ・コネチカット州の生まれ、プロテスタント系の神学校などで学んだ後、一八七二年、中国に派遣され、アメリカ人宣教師として中国に滞在した。天津などで布教や医療活動に従事するとともに、『ノース・チャイナ・デイリー・ニュース』(中国名『字林西報』)や『ノース・チャイナ・ヘラルド』(中国名『北華捷報』)などに頻繁に投稿した。一九二六年にアメリカに帰国した。アーサー・スミスは多作であり、中国語学や中国社会論、中国文化論等の領域にまたがる九種の著作を残した。そのうち、*Village Life in China: A Study in Sociology*, New York: F.H. Revell, 1899 は著名な中国農村社会研究の古典である。戦前に邦訳が出ている(仙波泰雄・塩谷安夫訳『支那の村落生活』生活社、一九四一年)。

Chinese Characteristics はアーサー・スミスの主著である¹。同書は『字林西報』に連載されていた記事をまとめて、一八九〇年に上海のノース・チャイナ・ヘラルド社から刊行され、さらに一八九四年にアメリカで増補改定版が刊行されている。同書には出版当時から様々な版本や無数の増補版が存在しており、英米語圏において好評を博したことが知られる。同書の内容は、中国人や中国人の性質をアメリカ人に分かりやすく紹介したものであり、パールバックの『大地』が一九三一年に刊行されるまで、中国人というものが雲をもつかむ存在だったアメリカ人にとってほぼ唯一といってもよい中国理解のためのガイドブックであった。

一方日本ではこの本の刊行から六年後、一八九六年に売り出し中の翻訳家であった渋江保(一八五七～一九三〇)によって博文館から『支那人気質』として翻訳刊行された。渋江保は森鷗外の小説『渋江抽斎』に登場する弘前藩医渋江抽斎の息子である。渋江保は独特のセンスによって、欧米の小説、評論を次々に翻訳していた。この『支那人気質』も当時ベストセラーとなったことが確認されている。日清戦争直後という時代状況が「中国モノ」に対する関心と呼んだに違いない。しかし当時、同書が大きな評判を呼んだのは、同書の内容がかなり関係している。いわゆる「嫌中」「侮中」本のはしりなのである。そのため明治日本人の中国観をうかがい知る格好のテキストであるはずの同書は、明治思想の研究者からほぼ「黙殺」されているといっても過言ではない。

¹ アーサー・H・スミス(石井宗皓・岩崎菜子訳)『中国人的性格』(中公叢書、二〇一五年)。

同書が唯一、日本の研究者によって言及されるのは、魯迅文学研究の文脈においてである。すなわち中国人の「暗い」側面を活写することが多かった魯迅の文学にそこはかとなく漂うアーサー・スミスの影響という観点である。魯迅は中国を救うためには「国民性」の改造が必要であると考へ、医学から文学に転向したとされる。魯迅の文学を読めば誰しも「国民性」についてあれこれ論じたアーサー・スミスの影響を「疑う」ことができよう。事実、そのような指摘は数多くなされてきた。魯迅が使ったとされる「国民性」という言葉もアーサー・スミスの日本語版『支那人気質』に由来するという分析がある²。魯迅は日本語版を読んだと見られ、魯迅自身も実際にアーサー・スミスの名を挙げて言及した文章を残している。しかし断片的なものの数点に過ぎない。そのため両者の影響関係について文献的な根拠に基づいて研究することには困難がともない、実証的な研究論文は在日学者の李冬木のものを除き、皆無に等しい。

研究上の困難のいまひとつの理由は、アーサー・スミスの *Chinese Characteristics* の中国語訳が近年に至るまで発行されてこなかったためである³。それ以前には日本語版『支那人気質』からの粗雑な「重訳」本や中華民国時期の社会学者潘光旦による部分訳くらいしか見当たらない。中国人にとってアーサー・スミスのこの本はいわば「謎の本」であり、研究の手がかりがなかったのである。しかし、一転して今日の中国では数多くの版のアーサー・スミス本が出版され、アーサー・スミス・ブーム、出版洪水の観を呈している。中国における外国人による中国人論への関心の高まりが背景にある。

さていったん話題は辜鴻銘(一八九五～一九二八)に移る。辜鴻銘についての細かい紹介は、拙稿に譲ることにして、ここでは触れない⁴。辜鴻銘はペナンに生まれ、西洋式の教育を受けた後、ライプチヒやエジンバラで西洋文学、言語学等を学んだ。その西洋語に対する知識を買われ、馬建忠や張之洞の幕僚を務めた。その間、いくつかの著述を行ったが、英語をはじめとした西洋語によるものであったため、中国国内には知る人は少なく、中国の言論界においては一貫して「辺縁」的な存在であったと言えよう。辜鴻銘が中国国内より早く、西洋での名声を確固たるものにしたのは第一次世界大戦後のことである。梁漱溟研究で知られるガイ・アリト(Guy Allito)は、第一次大戦後の沈んだ雰囲気の中で、タゴールや岡倉天心と並んで東洋の聖哲として知られたのは、梁漱溟でも梁啓超でもなく辜鴻銘であったという。第一次大戦中の一九一五年(一九二二年にも再版)、彼は英文で *The Spirit of the Chinese People*(別名『春秋大義』)を発表するとともに、大戦と東西文明の関係について論じ、中国文化によって西洋を救うことを高唱した。*The Spirit of the Chinese People* は辜鴻銘の思想を最も体系的に述べた著作であるとともに、最も影響力の大きかった彼の代表作でもある。

一九一〇年代に李大釗によって東西文化論戦の中で *The Spirit of the Chinese People* への言及があるものの、「伝聞」情報によるものであった。また一九二〇年代には北京大学で

² Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity-China, 1900-1937*, Stanford University Press, 1995.

³ 黄興濤「美国伝教士明恩溥及其《中国人的気質》」(『美』明恩溥『中国人的気質』中華書局、二〇〇六年)。

⁴ 川尻文彦「辜鴻銘と「道徳」の課題——東西文明を俯瞰する視座」(高瑞泉・山口久和編『中国における都市型知識人の諸相』大阪市立大学大学院文学研究科、二〇〇五年)。*The Spirit of the Chinese People* についての専論は、黄興濤「訳者前言」(辜鴻銘『中国人的精神』海南出版社、一九九六年)、崑山香織「辜鴻銘の『中国人的精神』(*The Spirit of the Chinese People*)」について(『京都産業大学論集・人文科学系列』四十五、二〇一二年)。

辜鴻銘の同僚となった胡適による辜鴻銘の特異なキャラクターへの言及があるものの、断片的なものにとどまっていた。一九三〇年代になって英語を能くする林語堂によって辜鴻銘の著述はようやく一定程度評価されたといってもよい。

The Spirit of the Chinese People は欧米、とりわけドイツで好評をもって迎えられたとされるが、辜鴻銘の念頭には欧米人による偏った「中国人像」を是正する狙いがあったことは間違いない。同書のなかでもアーサー・スミスへの言及があることは多くの研究者に注目されていない。辜鴻銘は *John Smith in China* という一節の中でアーサー・スミスに言及している。*John Smith* とは英語圏では最もありふれた凡庸な名前であり、日本でいう山田太郎に当たるであろうか。つまりイギリス人を僭称している。一見して分かるように、*John Smith* と *Arthur Smith* は韻を踏んでおり、*The Spirit of the Chinese People* の英語原文を見るとあたかも「洒落っ気」の含んだ筆遣いになっている。英語の原文を引用する。

John Smith in China wants very much to be superior person to the Chinaman and the Rev.Arthur Smith writes a book to prove conclusively that he,John Smith,is a very superior person to the Chinaman.Therefore,the Rev. Arthur Smith is a person very dear to John Smith,and the “Chinese Characteristics”become a bible to John Smith.(百十一頁)

中国にいるジョン・スミスは中国人より優れた人間でありたいと強く欲しており、アーサー・スミス牧師は彼、つまりジョン・スミスは中国人に対してとても優れた人間であると結論的に証明するために一冊の本を書いた。それゆえアーサー・スミス牧師はジョン・スミスにとっても愛されており、『中国人の性格』はジョン・スミスにとって一つのバイブルなのである。(川尻訳)

つまり *Chinese Characteristics* はアーサー・スミスによってジョン・スミス(イギリス人)の中国人に対する優越感を満足させるために書かれた本にすぎないとして酷評されている。

辜鴻銘は続けてアーサー・スミスの中国人の歴史意識を説明した部分として、*Chinese Characteristics* から以下の部分をそのまま引用している(五節「正確な時間の軽視」)。

「歴史にしても、中国人は天地開闢まで遡って記そうと試みるし、記述する内容も、過去に生じた樹木や干し草や切り株の全てを底に沈めて緩慢に延々と流れる濁った河の流れのごときで、ノアの洪水以前のように感じられる。時間の観念を比較的超越した民族だけが、そのような歴史を書いたり、読んだりすることができるのだろう。そして中国人の記憶だからこそ、その広大な「腹の中」に歴史の枝葉末節に至るまで蓄えることができたのだろう⁵。」

辜鴻銘はここで、アーサー・スミスが中国の歴史を無意味な時間の流れとして理解していることを示す証拠として提示している(ただしこの理解は辜鴻銘の誤解であり、アーサー・スミスの意図を正確に理解しているとはいえない。アーサー・スミスとしては、この節では時間にルーズで勤勉さに欠けた中国人に囲まれた中国生活体験に基づいた比喩的な表現にすぎず、中国人が無意味な歴史の時間をためこんでいると言いたいわけではない)。

この部分に続けて、イギリスの著名な漢学者ジェームズ・レッグ (James Legge, 一八一五～一八九七) が中国の正史について述べた「これほどまでに完全に消化された歴史を持つ国

⁵ 『中国人の性格』(中公叢書)四九～五〇頁を参照した。

はない。全体として信頼に足るものである」との言を引く。ここから文学的熱情を理解し賞賛するレグと在中国のジョン・スミスに気に入られているアーサー・スミスという二つの「西洋」の大きな違いに言及する。辜鴻銘は様々な「西洋」が存在すると言いながら、レグを持ち上げ、アーサー・スミスを貶しているのは明白である。ただし、辜鴻銘はレグの『論語』英訳をはじめとした中国古典翻訳を評価していなかったことはよく知られている。

The Spirit of the Chinese People (『春秋大義』) は戦時下(昭和十五年)の日本で魚返善雄によって日本語訳され、『支那人の精神』(目黒書店)と題して出版された。同書には当時の著名な漢学者たちが序を寄せている。山口察常は「中国の文化を高唱して之を欧米のそれと比較し、その内容の深遠博大な所以を力説した」とした。諸橋轍次は辜鴻銘の「博学と明敏」を称賛し、「欧米の支那研究者が自己の業績を過大視している態度を冷笑」している辜鴻銘をよしとしている。訳者の魚返善雄は「エクセントリックな風格と博引傍証縦横無尽の文体」が人々の辜鴻銘理解を遠ざけていたと指摘し、辜鴻銘思想の検討については訳者の任ではないとし、触れていない。まさしく辜鴻銘思想の検討そのことが今後、私たちに課せられているといえよう。

グローバル化する国際社会の中で東西文化比較論は、いまなお人々の興味をかきたてている。まさしく辜鴻銘がいみじくもいうように「西洋」とはいつでも様々であり、「西洋」と「東洋」を比較するなどそもそも無謀な試みといえよう。無謀だからこそ逆に人々の興味をひきつけるのかもしれない。ここに取り上げた二冊の中国人論は、東西文化比較の観点から英語を用いて欧米人を主たる読者と想定して中国人や中国文化について語っている。百二十年ほど前にアメリカ人、百年ほど前に中国人によって、それぞれ書かれたこの二つの中国人論・中国文化論は、日本を舞台の一つとして、東西文化や言語の垣根を超え、奇妙に交差しながら、数奇な運命を辿ったのである。そして今日なお私たちにさまざまな問いを投げかけているのである。